

福翁自傳（九）

福澤 諭吉 口傳  
矢野由次郎 速記

大隅作業

猪方先生の塾に入門

既に足を止めさせて緒方先生の塾に入門しなる時には勿論蘭學の稽古をしたので其稽古をした所は柏林と云ふ和蘭通詞の家、同じく柏林と云ふ醫者の家、それから右川櫻所と云ふ蘭法醫師、此人は長崎に開業して居て古派の門戸を張て居る大家であるから中々入門しきみとは出来ないソコで其處の玄關にて講会所の人なぞに習つて居たので豫う云ふやうに彼方此方にちよい／＼と教へて與れるやうな人があれば其處へ行く、何處の何某に便り誰の門人にになつてミフチリ蘭書を讀だと云ふ事ではないのでソコで大阪に來て緒方に入門したのは是れが本當に蘭學修業の始まり、始めたのは規則正しく薬物を教へて貰ひました、其時にも私は學業の進歩が隨分速くて塾中には大勢書生があるけれども其中ではマア出來の宜い方であつたが思ふソコで安政二年も終り三年の春になると新春早々茲に大なる不仕合の事が起つて未だと申すは大阪の食屋敷に勤番中の兄が僕麻羅斯に罹り病症が甚だ悪くないトウ／＼手足も叶はぬと云ふ程になつて追々全快するが如く全快せざるが如くして居る間に右の手は使ふるどが出来ず左の手に筆を持て書くと云ふやうな容體ソレと同時に其歳の二月頃であつたが諸方の聲の回怨私のお隣で豫て世話になつて居た加賀の岸岸輔と云ふ人が脇室扶斯に罹つて中々の難症ソコデ私は半生の恩人だからコンナ時に看病しなければならぬ又加州の學生 鈴木儀六と云ふ者があつて是れも岸と同國の織で私と鈴木と附人晝夜看病して凡そ三週間も手を盡したけれども如何しても惡症でどう／＼助からぬ一日此人は加賀人で宗旨は眞宗だから火葬にして其遺骨を親元に送て遣らうと兩人相談の上遺骸を大阪の千日の火葬場に持て行て焼て骨を本國に送り先づ事は済んだ所が私が千日から歸て三四日遅つとヨイと煩ひ付た容體がドウも只の風邪でない熱があり氣分が甚だ悪いソコデ私の恩先生は曾醫者だから誰かに見て貰た所が是れは脇室扶斯だ岸の熟病が篤第の事だと云て居る間に其事が先生に聞えて其時私は堂奥の倉屋敷の長屋に寝て居た、所が先生が見舞に見えまとして愈よ脇室扶斯に逢ひない本當に療治しなければ是れは馬鹿にならぬ病氣であると云ふ失れから私は其時に今に至れぬ事のあると安んのば緒方先生の深切「乃翁は花瓶の病氣を離れて遠る、餘て遣れども万が自分が自分で應付するみどは出来ない所分てももとて上昇へ七日後も」

云ふ醫者に執匙を託し内藤の家から樂を貰うて  
先生は只毎日來て容體を診て病中の養生法を  
指圖するだけであつたマア今日の學校とか學  
塾とか云ふものは人數も多く逆も手に及ばな  
い事で其師弟の間は自から公なるものになつ  
て居る、けれども昔の學塾の師弟は正しく親  
子の通り緒方先生が私の病を見てどうも樂を  
授るに迷ふと云ふのは自分の家の子供を療治  
して逍るに迷ふと同じ事で其弟子は質子と少  
しも違はない有様であつた後世段々に世が開  
けて進んで來たならばこんな事はなくなつて  
仕舞ませう私が緒方の塾に居た時心地は今  
の日本國中の學生に較べて見て大變に迷ふ私  
は眞實緒方の家の者のやうに思ひ又思はずに  
は居られませんソレカラ唯今申す通り父同  
様の緒方先生が立會で内藤敷馬先生の執匙で  
有らん限りの療治をして貰ひましたが私の病  
氣も中々快くない煩ひ付て四五日目から人事  
不省んと一週間ばかりは何も知らない程の容  
態でしたか幸にして全快に及び衰弱はして居  
ましたけれども私は若し平生身體の強壯な其爲  
めでせう恢復は中々早いモウ四月になつたら  
身に出て歩くやうになり其間は兄は僕麻質斯  
を離て居り私は熱病の大病後である如何にも  
始終が付かない

其中に丁度兄の年期と云ふものがあつて二ヶ  
年居れば國に歸ると云ふ約束で今年の夏が二  
年目になり私も亦病後大阪に居て書物などを讀  
むなども出来ず兎に角に歸國が宜からうと云  
ふので兄弟一緒に船に乗て中津に歸つたのが  
其歳の五六月頃と思ふ所が私は病後ではある  
が日々に恢復して兄の僕麻質斯も全快には及  
ばないけれども別段に危篤な病症でもない夫  
れくに私は又大阪に參りませうと云て出たの  
が其歳即ち安政三年の八月モウ其時は病後と  
白炊即ち土鍋で飯を焚て喰て毎日朝から夕刻  
少しく早く交替するの機會を得せしめたらん  
まで緒方の塾に通學して居ました

# 新政黨の組織について

開の端を開きたり伊藤を中心として政界に立たんと欲せば其根據を擧げるふと又伊藤の如くならざる可らず此點より見るも藩閥の遺跡を守るの不可なるを知る可し要するに政治の基礎は既に定りて復た動す可らず今後の争點は只政策の是非施政の巧拙にあるのみ斷然藩閥奥味を脱し武斷主義を廢して廣く國民の間に同情を求めんみど我輩の吳々も勧告する所なり

## ○總選舉彙報（四）

滋賀縣 第一區にては前代議士谷澤龍藏氏（無所属）矢張り切て出で憲政黨よりは望月長夫氏を推して谷澤氏を排斥せんと已に競争を始めたり○第二區の憲政黨は前代議士片岡久一郎氏を候補者に推選する事となり別に競争者としてあらざれば其當選疑ひなからん○第三區（二人）は尙ほ未定にて憲政黨にては今二十七日を期して候選會を開く筈なるが多分前代議士西川重威氏と藤野辰次郎藤田治郎右衛門兩氏の内孰かを推す事となるんか○第四區も尙ほ未定にて前代議士脇坂行三氏或は辭退すべしとの説もあれば左る場合には憲政黨にて上田喜陸、布施孫一郎兩氏の内より候補者を立つるならん

諏訪縣 第一區は憲政黨にて何人を推選すべきか尙ほ未定なれば近日中に協議して決定する筈なり○第二區は前代議士伊達文三氏（憲政黨）○第三區は前代議士廣住久道氏（同上）○第四區は前代議士三橋四郎次氏（同上）○第五區は前代議士寺田彦太郎氏（同上）○第六區は前代議士松嶋廉作氏（同上）を孰も再選する事に決し各區とも反対の候補者なし○第七區二人は前回には競争の最も激烈を極めたる區なりしが自由進歩兩派の合同したる結果兩派の間に種々熱議を経たる末前代議士江原繁六氏等は辞退して新に大村和吉郎（憲政黨）永井嘉六郎（同上）兩氏を推選する事に確定したれど此區も亦競争の運動を要せずして兩氏とも無事平穔に當選すべし

青森縣 同縣の憲政黨支部にては去月三十日を以て既も前代議士を再選する事に決し即ち第一區（二人）には奈須川光寶、伊藤兵衛の兩九郎兵を候補者に推選して夫々運動の準備に着手し謀め反対候補者の競争に備へたりしも出でざるに限らねば結局各區とも前代議士の

○總選舉氣氛

八千五百十九  
九千百十七萬  
り尙ほ本月上  
の如し

金貨印付

銀地金合計 三  
金銀差引三百

にして之を表  
十九萬千七百  
たる勘定なり

## 三十二年度の 内務

審査の上、  
其概算を聞く

海道施設費等  
ては前年度に  
々減少するに

るを以て差引  
圓餘の増加な

中村陸軍次官  
調査を了りた  
とを得るなら

十年計畫に對  
て講定せる所  
針に從ふて豫

とて新に増  
の糧食に於て  
代價は是迄十

最近三年の年平均の米價